



PROMISE(無極)

2006(平成18)年2月11日鑑賞<梅田ピカデリー>

監督・脚本=陳凱歌チェン・カイコー/出演=真田広之/チャン・ドンゴン/セシリア・チャン/ニコラス・ツェー/リウ・イエ/チェン・ホン (ワーナー・ブラザーズ映画配給/2005年中国映画/124分)

第2章

ハリウッドに与えた影響大!

……陳凱歌チェン・カイコー監督が描き出す摩訶不思議な神話の世界において、「約束」「運命」をキーワードに展開される、4人の男たちと1人の女の人間模様はそれなりに面白いもの。しかし、感動性、重厚性、ドラマ性のどれをとっても、『北京ヴァイオリン』(02年)、『始皇帝暗殺』(98年)、『さらば、わが愛/霸王別姫』(93年)に及ばない、今風のワイヤーアクション映画。「米中融合」チェン・カイコー「中台融合」は政治の世界、軍事の世界だけにして、陳凱歌監督には「これぞ21世紀の中国映画」という中華製の感動作をつくってもらいたいものが……。

陳凱歌チェン・カイコーは、なぜ、今これを……?

張藝謀監督チャン・イーモウと並ぶ(いや、その先輩格たる)中国第5世代監督の代表陳凱歌チェン・カイコー監督が、今回この『PROMISE』を監督したのは、張藝謀監督チャン・イーモウがハリウッドに進出して大ヒットさせた『HERO(英雄)』(02年)、『LOVERS(十面埋伏)』(04年)を意識したものと考えざるをえない。

私は陳凱歌監督チェン・カイコーの『始皇帝暗殺』(98年)を感動をもって観たが、興行的にこの大作はもうひとつだったのに対し、同じ始皇帝暗殺をテーマとしながらも、ワイヤーアクションを多用した全く異質の『HERO(英雄)』がチェン・カイコー大ヒットしたことに陳凱歌監督は納得できなかったはず……。

そのため、張藝謀監督チャン・イーモウより先にアメリカに渡り、ニューヨークで生活しながらハリウッド進出を計っていた陳凱歌監督チェン・カイコーは、『キリング・ミー・ソフトリー』(01年)をつ

くったりして「寄り道」もしたが、その後原点回帰の感動作『北京ヴァイオリン』(02年)を監督した。

これはあたかも張藝謀監督が、『HERO (英雄)』『LOVERS (十面埋伏)』の後、「武侠映画はこれで打ち止め」とばかりに、原点回帰して『あの子を探して』(99年)、『初恋のきた道』(00年)、『至福のとき』(02年)という「しあわせ三部作」と同じ系譜の『単騎、千里を走る。』(05年)を監督したのと同じようなもの……。

そんな陳凱歌監督が、原点回帰路線をさらに進めるのではなく、ハリウッドに対抗するべく、そしてまた張藝謀監督に対抗するべく打ち出したのがこの『PROMISE』。しかし、なぜ今ワイヤーアクションなのか、なぜ今CG多用の幻想シーンなのか、そしてまたなぜ今日本、韓国、台湾、中国のトップ俳優を集め、キャラの際立ったストーリーなのか？ 私には納得できないことばかり……？

ヒットすればその企ては大成功だが、もしコケてしまったら、陳凱歌監督には大きな痛手になるはず……？ しかして、公開初日2月11日(土)の客の入りは……？

タイトルが物語るもの

映画のタイトルをどうつけるかは難しいもの。この映画の邦題『PROMISE』の本来の意味は「約束」だが、この映画の事前の宣伝では「運命」という漢字をかぶせることもあった。それは、この映画に登場する大將軍(真田広之)、奴隸(チャン・ドンゴン)、王妃(セシリア・チャン)、そして北の公爵(ニコラス・ツェー)と刺客(リウ・イエ)という5人の主人公たちの運命と、その運命を司る神「満神」(チェン・ホン)との約束をテーマにしているためらしい……。

しかし、陳凱歌監督がつけた原題は『無極』。これはパンフレットによれば、「文字どおり極まりの無いこと、果てしのないことだ。中国古代の宇宙論では無形無象の完全な空(くう)の状態を指し、そこに万物生成の根元である混沌とした“太極”が生じるとされた。また、“太極”の無限性そのものを示す」とのこと。当然こちらの方がピッタリなのだが、日本人にはこの『無極』という言葉はなじみが薄いもの。まして『マトリックス』(99年)と同じようなワイヤーアクションを売りモノにして若者客を獲得しようとしても、国語力、漢字力が著しく低下している日本の若者には、無極などという言葉・概念は理解不可能。そしてまた、どんな世界を描いた物語なのかを、この無極という言葉からイメージすることも期待できないはず……。

そこで窮余の策としてネーミングした邦題が『PROMISE』、というのが私の解釈だが……？

米中融合……？ 「2つの中国」の融合……？

日本では2006年1月民主党の前原代表が「中国の軍事脅威論」を打ち出したため、民主党の一部（旧社会党系）から、「かつての軍部の青年将校みたい」との批判の声があがっている。他方、社民党は2006年2月11日の党大会で、「自衛隊は違憲」と断定し、かつての非武装中立路線へと「先祖返り」をした。注目されるこれらの動きの行く先は……？

そんな日本の思いつきの(?)な動きに対し、アメリカの中国脅威論はさすがに資料による裏付けが豊富で、こちらも2006年1月以降、中国脅威論が日に日に高まっている。しかし映画の世界では、確実に米中融合が進んでいる……？

すなわち陳凱歌^{チェン・カイコー}監督は既に何年も前からアメリカのニューヨークに住んでおり、アメリカの映画人との交流も盛ん。したがって、『キリング・ミー・ソフトリー』は、完全なハリウッド映画といってもおかしくないようなアメリカ映画だった……？

この『PROMISE』でも、アメリカ人俳優は登場しないものの、撮影、効果、音楽などのスタッフにはアメリカ人が起用されている。

さらに2008年の北京オリンピックを控えて「中台対立」は激しさを増しており、中国軍による軍事演習の実施や潜水艦の展開などが話題を呼んでいるが、この映画では米中融合のみならず、中台融合も顕著。

すなわちニコラス・ツェーは香港、リウ・イエは中国の役者、そしてアクション振付のウェイ・トン、ディオン・ラムはともに香港の人材……。ちなみに、満神役で登場したチェン・ホン^{チェン・カイコー}は『北京ヴァイオリン』にリリ役で登場した女優であり、言わずと知れた陳凱歌の奥さん。

このようにこの映画を観れば、米中融合、「2つの中国」の融合が目立つのだが……？

「3プラス2」とは大きく異なる「4プラス1」の人間模様

去る2月5日(日)大阪松竹座で観た市川海老蔵の『信長』は、織田信長・明智光秀・豊臣秀吉という3人の男と、お濃・お市という2人の女の生き方に焦点をあてた

歌舞伎劇で、結構興味を引くものだった。これに対し『PROMISE』は、光明・昆崙・無歎・鬼狼という4人の男と、光明・昆崙・無歎の3人の男との愛に絡む傾城という女性の生き方に焦点をあてたもの。といってもすべて架空の物語であるため、その人物像をどのように理解するかは容易ではない。

そのため『PROMISE』では、1人の少女と満神との間で「世の中のすべての男から望まれる姫にしてあげましょう。そのかわり、あなたは一生本当の愛を得ることができない。それでもいいですか？」という約束を交わすシーンが登場し、さらにこの少女と1人の少年との間で交わされるある約束とその裏切りのシーンが登場する。観客は、この最初の「約束」が意味するものをどう受けとめるかがポイント。

次に3千人の部隊で2万人の敵を打ち破った大將軍の光明とその戦いで活躍する奴隸の昆崙が登場するが、そこで示される2人の人物像はかなり特異なもの。しかし、当然ながらその後の物語の進行につれて、この2人の立場は、逆転また逆転……。

もっと訳のわからないキャラが無歎と鬼狼。無歎は常に光明の二番手に甘んじていることにイラ立ちを覚えているうえ、王妃傾城にゾッコン。そのため光明による「王殺し事件」が発生すると、たちまち策略をめぐらすことに。この無歎が人を信じることのできないクールな人間になったのは、なぜなのだろうか？

こんな3人の主役に肩を並べるくらいウエイトがあるのが、「雪国の男」で黒衣を着た刺客の鬼狼。さて、彼の行動の意味するものは……？

そして「私の衣の中を見たい……？」と男たちを挑発して王を殺させるきっかけを与える美しい王妃傾城は、「一生本当の愛を得ることができなくてもいい」との満神との約束どおり、光明や昆崙そして無歎の「求愛」を拒否し続けるのだろうか？

こんな神秘的で、『無極』というタイトルがピッタリの「4プラス1」の人間模様をタップリと楽しみたいものだが……。

ワイヤーアクションはもう限界……？

私はずっと『マトリックス』で多用されていたハリウッド型のワイヤーアクションは大嫌い！ したがって、『HERO（英雄）』の中華型（？）ワイヤーアクションもあまり好きではないが、あれが良かったのは、衣装と色彩の妙によるもの。今回の『PROMISE』も、神話の世界を連想させるさまざまな美しい衣装が工夫されているが、男優のウエイトが大きい分、『HERO（英雄）』におけるマギー・チャンやチャン・ツ

イーの存在感に負けるため、分が悪い……。

したがって、『HERO (英雄)』に比べると、衣装や色彩の美しさの点でもイマイチだし、ワイヤーアクションの華麗さにおいても、『HERO (英雄)』の方が1枚上……？ というより、観客自体がワイヤーアクションに飽きてきたため、そもそもワイヤーアクション自体がもう限界なのでは……？

ニコラス・ツェーとレスリー・チャン比較

この映画でニコラス・ツェー演ずる無欲は、腕は立つし、策略をめぐらす頭脳もすばらしいものだが、何となくナヨナヨしていてちょっとオカマ風……？ なぜそういう設定にしたのかはよくわからないが、そこで思い出すのが、中国映画としてはじめてカンヌ国際映画祭のパルムドール賞を受賞した『さらば、わが愛／霸王別姫』(93年)において、程蝶衣役で登場したレスリー・チャン。京劇の舞台俳優として虞姫を演ずるためとはいえ、そこでのレスリー・チャンの女形としての役づくりはすばらしいものだった。それに比べると、同じ香港俳優で若手代表のニコラス・ツェーが演じた無欲は今一歩ながら、そのニヒルな表情と演技力はなかなかのもの。

ジャッキー・チェンと共演した『香港国際警察／NEW POLICE STORY』(04年)におけるイケイケドンドンの刑事役ではなく、こういう役づくりは難しいものだが、今後の彼の成長には大いに役立つはず。同じ香港俳優で傾城を演じた美女セシリア・チャンとともにその将来を期待しよう。

守られない約束の続出は……？

この映画には、『PROMISE』という邦題であるにもかかわらず、「守られない約束」のシーンが次々と登場する。その第1は、冒頭における少女と少年との間の約束。この神話の国においては、いかに口頭の約束の価値が低いかを如実に示すシーンだが、これがトラウマとなった少年が成人になると果たして……？

満神との間で交わした「一生本当の愛を得ることができないことを認める」という約束に傾城が苦悩するのは当然だが、ラスト近くの大將軍光明とNo.2の無欲との決闘シーンにおいても、約束違反のシーンが次々と……。西洋の騎士道においても日本の武士道においても、信義・約束が最大限重視されていることは周知の事実だが、チェン・カイコー陳凱歌監督が『PROMISE』で描いた神話の国では、こんな約束違反は当然のこと

……？ しかし、こんな約束違反のシーンが次々と登場するのは教育上ちょっと……？

あゝ感動と重厚さ、ドラマ性はどこに……？

チェン・カイコー
陳 凱 歌監督の『黄色い大地』（84年）は、「新生中国映画ここにあり！」ということ
を全世界に知らしめた衝撃作。その陳 凱 歌監督はその後も、『さらば、わが愛／
霸王別姫』ではドラマ性を、『始皇帝暗殺』では重厚性を、そして『北京ヴァイオリ
ン』では感動を観客に与え続けてきた。

しかしこの『PROMISE』のどこに、その感動と重厚さ、ドラマ性があるのだろうか？

チェン・カイコー
張 藝 謀監督が『単騎、千里を走る。』で原点回帰したように、陳 凱 歌監督にも
『PROMISE』でこの手の映画づくりは終わりとして、原点回帰し、『北京ヴァイオリ
ン』のような感動作をつくってほしいものだ。

2006(平成18)年2月13日記

ミニコラム

チャン・イーモウ 北京五輪に向けて張 藝 謀は？

『王妃の紋章（満城尽帯黄金甲）』の
記者会見の席で、「今後2年間は映画
の製作は行わず、2008年の北京オリ
ピック開・閉幕式の演出に全力投球す
る」と張 藝 謀が語ったのは06年4月
のこと。以降、北京五輪の開・閉幕式
の演出プランは着々と進んでいるよう
だが、さて本番は？

文化芸術顧問に就任予定だったステ
ィーヴン・スピルバーグ監督が08年2
月に「スーダン・ダルフル紛争への
中国政府の対応の不満」を理由に降板

し、また08年3月14日以降のチベット
騒乱を理由とするドイツ首脳らの開
会式欠席の表明や4月以降各地で起
きている聖火リレーへの妨害活動は、
国家の威信にかけて「北京五輪の成
功を！」と意気込む中国にとって大
きな逆風。そんな中、総監督を務
める張 藝 謀の責任は重大だ。東
京、ソウルに次ぐアジア3番目の「
平和の祭典」が、彼の手腕により大
成功することを心から願いたい。

2008(平成20)年4月14日